

2023.12
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やく 富 薬

12号

第45巻
No.413



コショウ *Piper nigrum* L.

(コショウ科 *Piperaceae*)

生薬

クロコショウ（黒胡椒） 完熟前の緑色の果実を収穫し、そのまままたは湯通しした後天日乾燥する。乾燥の際、果皮が黒くなりシワが生じる。
シロコショウ（白胡椒） 赤色に完熟した果実を収穫し、1週間ほど水に浸して発酵させた後、柔らかくなった外果皮・中果皮を除去したもの。（種子とこれを包む硬い内果皮のみ）

成分

アルカロイド:piperine,chavicine、精油:phellandrene, pinene,caryophyllene,limonene 等

効能

発汗、駆風、健胃薬として胃弱、消化不良、下痢、腹痛に服用する。薬用には一般に白胡椒を用いる。スパイスとしても名高い。



生薬 クロコショウ(黒胡椒)

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



コショウにはインド南西部のマラバル地方原産で、普通にコショウ(胡椒)と呼ばれるものとベンガル、ネパール、アッサム、カシミールなどインド北東部が原産のインドナガコショウ(ひはつ、畢撥*P. longum*)があります。コショウはサンスクリット語で「maricha(マリチャ)」と言いますが、英名の「pepper」はサンスクリット語でインドナガコショウを示す「pippali」からギリシャ語「piperi」、ラテン語「piper」と転じたもので、名前の取り違えが起こったと考えられています。この間違いは本当のコショウが伝わってもそのまま用いられ現在に至っています。これはインドナガコショウの刺激性や香辛料としての価値が似ていたため、また産地のインド北部から

陸路ペルシャを経てギリシャに至るルートにより運ばれ、コショウの産地のインド南部からの輸送はあまりなかったからではと考えられていることによります。

年平均気温22-28度、年間降水量1800-2800mmの温暖で湿潤な気候を好み生育するつる性の木本で、長さ10m以上になり、節は膨らみ、節から不定根を出して他物に絡み付きます。葉は互生、葉身は卵形から長卵形、先端は尖り、無毛で革質、表面は光沢がある暗緑色です。野生株では単性花をつける雌雄異株のものが多く、栽培される系統のものは雌雄同株であり、また様々な程度で両性花をつけます。野生型では果実量が少ないが、栽培されるものでは両性花率が高い系統ほど果実量が多いことから、栽培の歴史の中でこのような系統が選択されてきたと考えられています。花期は6-10月、穂状花序、果穂は長さ15-17cmほどになり、50-60個の果実がなります。

インドではBC1000-500年頃のバラモン教の聖典「ヤジュル・ヴェーダ」や「アタルヴァ・ヴェーダ」に記述があり、かなり古くから用いられていたようです。現在のインド医学の「アーユルベータ」においても興奮、刺激、去痰、駆風、解熱、駆虫作用があるとして用いられています。

ギリシャではBC6-5世紀頃、ヒポクラテス(BC460-BC370頃)によって「胡椒と蜂蜜と酢を混ぜたものは婦人病に効く」と薬用として紹介され、その後、ギリシャ人やローマ人にとって、重要かつ良く知られた香辛料となっていきました。テオフラストゥス(BC371-BC287)は「長コショウと黒コショウ」について触れています。ディオスコリデス(40-90)の『薬物誌』は「コショウは、インドで生育する低木といわれている。はじめは長くさやのようであるが、これが長コショウであり、その中にミリウム(Miliumキビ)のようなものが入っていて、これが正真のコショウになる。この実は時がくれば開裂し、我々の知っているあのコショウの粒の集まったものが顔をのぞかせる。そのうち、あるものは熟していない白コショウである。この白コショウはとくに目薬、解毒剤、テリアカ性薬剤に配合するのに適する。…黒コショウは白コショウより甘味や辛味が強く、口あたりがよく、また熟しているので芳香に富む」など長コショウについて、また白、黒コショウについても記し、香料として、薬用の使い方でも説明しています。

中国では後漢時代(25-220)には伝わっていたようです。『新修本草』(659)に「胡椒は西戎に生ずる。形は鼠李子(クロウメモドキ*Rhamnus japonica var. decipiens*)のようなもので、食物の調理にこれを用いると味が甚だ辛辣だ」と述べると同時に「気を下し、中を温め、痰を去り、臍附中の風冷を除く」と香辛料として利用することや効能についても記しています。日本では天平勝宝8年(756)に聖武天皇の77日忌にその遺品が東大寺に献納され、その目録『東大寺献物帳』の中の「種々薬帳」に「胡椒」が記されており、かなり古い時代に渡来した貴重な薬物であったことが分かります。(村上守一 記)